

KOTONONE
Series of Stories
vol.14

**片手で
ハンドルを握る**

お母さんから、ベビーカーを右手で受け取ると、ヒョイッと片手で持ち上げた。そのままトランクへ。その間、ずーっとここに、笑顔、笑顔。「子どもは大好きなんですよ」と言いながら、後部座席へ母子を案内する。確認して扉を閉めたら、さあ、出発。運転する姿を後ろから見ていると、横から、横から見ると、ハンドルを回すのに右手しか使っていないのがわかる。ハンドルにはノブのような器具がついていて、その器具を

握ることで、片手でもスムーズにハンドルを回せる。運転自体は実になめらかで、片手で運転しているとは思えない。国本正文さんは五四歳。タクシー運転手として働いて、もう九年になる。二〇〇六年に、二種免許を取得した。タクシー運転手になったのは、国本さんが障害者になってからのことだ。

**熱中症から
くも膜下出血を発症**

「今でも鮮明に覚えています。二〇〇〇年の八月二〇日のことでした」。当時国本さんは、昼間は電気工事、夜

は高速道路のジョイント工事と、二つの仕事をかけもちしていた。睡眠時間は二時間ほど。そんな状態が一〇日ほど続いていた。「親父が経営していた電気工事会社をやめてから、二年間くらい、請負仕事だけで生計を立てていたんです。不安定な身分ですし、来た仕事は断れなかった」。ちょうどPHSの普及期で、仕事には事欠かなかったというが、五歳を筆頭に二人の子どもを抱えていた国本さん、仕事はいくらあってもよかった。「ある日、熱中症にかかってしまったんです。体がしびれてしまつて。もう今日は夜の仕事の方は休む、と女房に伝えて、寝ようとしたんですけど、しびれが収まらない。何か話そうと思ったら、ろれつが回らない。これはまずい、とすぐ救急車を呼んだ。わたしの記憶はそこまです。そのまま、救急車の中で国本さんは意識不明になった。

**退院までは
半年かかった**

意識を取り戻したのは、一カ月後のこと。脳動脈奇形破裂による、くも膜下出血。熱中症で血液濃度が上がって、血液が詰まったことが原因だ。このま

編集部=文
text by KOTONONE
信澤邦彦=写真
photograph by Kunihiro Nobusawa



シリーズ 障害者の就労事例 14

タクシー運転手の星

くも膜下出血で倒れ、
障害の残った国本正文さんは、
一家の大黒柱として家族を養えない、
もどかしい時間を過ごした後で、
タクシー運転手という
「天職」に出会った。
障害のあるなしに関係なく、
タクシー会社「ひまわり交通」の
エースとして活躍する
国本さんに、話を伺った。